

## エアランガ大学歯学部への訪問記②

小松澤 均

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 健康科学専攻 発生発達成育学講座  
口腔微生物学分野

学術交流のため、インドネシアのエアランガ大学に訪問することになった。初めてのインドネシア訪問である。訪問前はインドネシアというと「スマトラ、ジャワ、バリ島、首都ジャカルタ、赤道直下で暑い、植民地化時代、感染症」などを想像する。日頃、微生物学の講義をしているので、マラリア、デング熱、鳥インフルエンザ、特に「下痢症には注意」ということを考えてしまう。仕事上、ある意味“感染症”に過敏になってしまうのが悲しい。

さて、今回訪問したエアランガ大学はジャワ島の東に位置するインドネシアでは2番目の都市であるスラバヤ市に位置する。その昔、スラ(サメ)とパヤ(ワニ)が互いに最強をかけて戦った地としての神話に由来する名前らしい。鳥居教授、中村教授、歯学部生の品川君と私は夕方にスラバヤ近郊のジュアンダ国際空港に到着。空港にはエアランガ大学の先生方が数名出迎えて頂いた。この時点から中村教授は日本人のベールを脱ぎ棄て、インドネシアの人になった。インドネシア語での会話が飛び交い、哑然とした。中村教授の楽しそうな顔と出迎えて頂いた先生方が皆さん気さくで色々と話しかけてくださった。その後、車に乗り市内のレストランに着いた時には真っ暗であった。レストランでは魚や肉料理、ナシゴレン風のご飯などどれも美味。ただ、ジュースに入っていた氷やかき氷等は少し不安に思いながら戴いた。ここにも日頃学生への講義で「海外旅行の時には生水に気を付けるのは当たり前だが生野菜のサラダや氷も注意が必要」と言っていたことが頭をよぎる。その後、ホテルに送って頂き、その日はゆっくり休んだ。

翌朝、朝早めに出迎えがあり、車で大学へ向かう。この日はエアランガ大学で鹿児島大の教授3名とエアランガ大学の先生数名によるシンポジウムが予定されていた。大学につき、そのままシンポジウム会場に行くと、多くの学生さんや教員の先生がいた。ただ、学



スラバヤの象徴：ワニとサメのモニュメント

生と教員の区別は全くつかず、割合としては女性が多かったように思う。最初セレモニーがあり、いよいよシンポジウム開始。中村教授が先陣を飾られた。イントロにインドネシア語が使われ、聴講の人たちの心をつかみ、その後ご専門のお話しをされた。次に私が細菌学の教授であるということで、エアランガ大学の細菌学の先生が口腔内の免疫について話をされた。研究の話というよりは lecture のようであった。ついに私の出番。タイトルは「Recent topics on Staphylococcus aureus infection」で黄色ブドウ球菌の話である。特に

私の専門分野である薬剤耐性菌の話が中心。翌日大学訪問をしてわかったことだが、歯科の学生は一般細菌についてはレポート形式での勉強であり詳しくはないことをお聞きした。講演する際にはそんなこと知る由もなし。講演をしながら、聴講の人たちが難しそうに聞いているのがわかる。中には諦め顔の人も。内容を少し軌道修正し、わかりやすく話そうとしたが、英語なのでなかなか難しかった。細かい話を抜きながら説明し、予定より早く終了。そして、反省。いや、きっとブドウ球菌感染症の重要性がわかってくれたはずだと自分に言い聞かせた。次回は（あとと仮定しての話だが）より興味のある話をしたいと思う。その後、昼休憩。その際に医学部の細菌学の先生と少し研究の話をした。昼休憩の後、鳥居教授が講演をされた。保存治療の話で皆さん、興味深く聞いておられた。今回のようなシンポジウムでの基礎研究の発表の難しさを認識し、貴重な体験をさせて頂いた。鳥居教授の講演の後、私たちはシンポジウム会場を後にし、スラバヤ観光に出かけた。スラバヤの名前の由来となったサメとワニのモニュメント、タバコ工場などを見学し、土産などを買っているとあっという間に夜になっていた。その後、エアランガ大学の細菌学教室の先生方たちを含め10数人でインドネシア料理を堪能した。細菌の話はほとんどなく、料理の話などで楽しく時間が過ぎていった。

翌日は大学訪問。それぞれ別行動。私は細菌学の先生方4名と基礎研究や学生講義について話をした。エアランガ大学ではOral biologyの中の1つとして細菌学があり、授業コマ数は私達が担当する口腔微生物学のコマ数に比べおよそ3分の1程度であることを聞いた。それで細菌学の全ての内容を講義できるか聞くと、先に書いたが一般細菌学などはレポート形式で授業時間外の自主学习であるとのこと。学生さんはネットを駆使し、情報を集めレポートを作成するようだ。しかし、ネット上の情報は時として間違っていることもあり、正確な情報を得るのは独学では難しい。現在、授業コマ数を増やす検討をしているとのことであった。しかし、講義で使用する教科書（英語版）は日本でも使用されている十分なものであった。また、一人の学生が実験のことについて質問があるとのこと。話を聞いた。患者血清を用いた歯周病原菌に対するウェスタンブロットに関することであった。技術的なトラブルであったため、それを指摘し、また必要ならばメールでやり取りすることになった（いまだに連絡はないですが）。研究場所を見せて頂いたが、実習室



シンポジウム会場でしばし談笑

の一角にある狭い部屋で、日本の基礎研究室に比べると研究をする上では色々と支障があるように思えた。その隣には口腔病理学の研究室もあったが、やはり一室のみで顕微鏡で何人かの先生方が組織を見ておられた。その中の一人の先生方がぜひ日本で学位を取りたいと言っておられた。話をすると、留学はしたいが、やはりお金の問題があるとのことであった。私の所にもメールで海外から大学院についての照会はあるが、ネックはお金の問題である。インドネシアあるいは日本で奨学金を取らないといけなのだが、これが結構難しい。鹿大歯学部も何とか海外留学生を多く受け入れるために、奨学金獲得の方策を練らないといけないことを再認識させられた。その後、各診療科を見学した。最後にクーン歯学部長をはじめ多くのスタッフの方たちと一同に会し、今回の訪問について話し合った。

鳥居教授と私はこれで終了。あっという間の滞在であった。最後にケンタッキーフライドチキンを皆で食べに行き、空港まで送って頂いた。飛行機に2回乗って帰国するが、2回の機内食を鳥居教授はアルコールとともに完食された。私は少々疲れて食べきれず、鳥居教授のタフさに脱帽。

国際学術交流の楽しさと難しさが体験でき、今後の鹿大歯学部の国際交流の充実化に向けて頑張らねばと再認識した。ただ、海外に行っていないも実感するのだが、日本食はうまい！